

中世港町安来の復元的考察

島根大学教育学部

長谷川 博 史

中世港町安来の復元的考察

島根大学教育学部 長谷川 博 史

はじめに

宮本雅明氏は、海岸に直行する道を基軸とする中世港町が、海岸に平行する道に沿う近世港町へ変貌していったことを「日本型港町」の成立と規定した（『日本型港町の成立と交易』〈歴史学研究会編『シリーズ港町の世界史2 港町のトポグラフィ』〉2006年）。このような中近世移行期における港町の変化を、山陰地域において検討しようとするのが、本稿の目的の一つである。

出雲国能儀郡安来は、中世～近代初頭の山陰地域を代表する港湾都市であった。元弘2年（1332）に隠岐へ流された後醍醐天皇が安来から出帆し（『増鏡』）、足利直冬が軍事拠点として滞在したこと（『北島家文書』）などは、隠岐や日本海沿岸地域間や、それらと出雲・伯耆内陸部とを結ぶ結節点として、政治的・経済的な重要港湾であったことを示している。特に、1420年には『朝鮮王朝実録』に朝鮮人70余戸が存在すると記されていたり、安来荘内や美保関を領有していた松田氏が1468年に朝鮮へ使者を派遣したと『海東諸国紀』に記され、明の日本研究書『日本図纂』（1561年）に他の港湾都市とともに「也生忌」の名が記されているように、15～16世紀の安来が広域的物流拠点として繁栄した徴証を垣間見ることができる。しかしながら、中世以前におけるその具体的な姿を示す同時代史料が残されているわけではない。本稿では、後世の史料や現在の状況をふまえながら、港町安来の復元的考察を試みたい。

I 史料に現れる中世「安来町」

1420年の安来に朝鮮人だけで70戸以上が存在したという数字が、どれほど実像を反映しているのかは定かでないが、すでに中世段階から「町」と称すべき実態があった可能性は十分想定できることである。しかし、史料によってそれを確認することは容易ではない。

安来に「町」が存在し、「町役」を課せられていたことは、杵築大社（出雲大社）の御師であった坪内氏のもとに残された次の史料によって確認できる。

秋上宗信書状（「坪内家文書」〈『大社町史 史料編 古代・中世』1721〉）

尚々、富田へ^茂致其調事候間、少御油断候ハハ、不可然存候、為向後候間、申入事候、かしく、態申入候、如先年安来町役之儀、諸役我等於于今申付候、其元手前御油断儀候、早々可致其調候、貴所御存知之處、無残被仰付可給候、委細含口上候、恐々謹言、

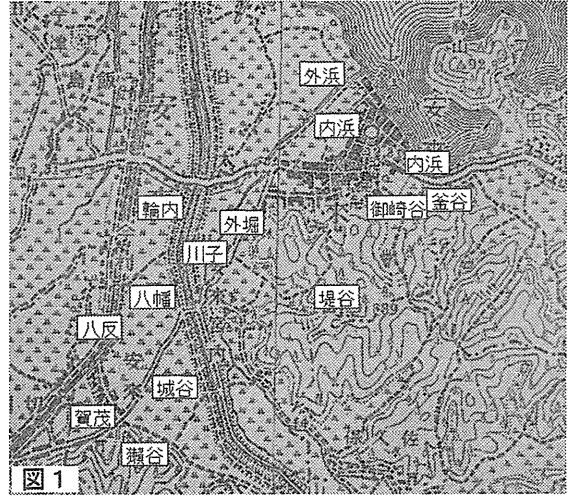
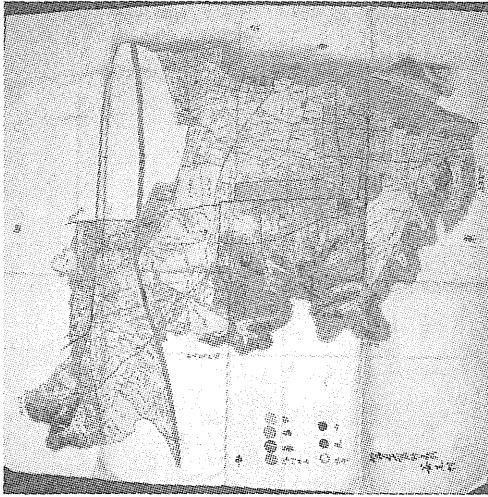
秋上庵介

宗信（花押）

十二月五日

坪内殿 まいる 御宿所

尼子氏家臣の秋上宗信は、永禄12年（1569）に尼子勝久とともに出雲国へ乱入し、森山城（松江市美保関町）の城督を務めたが、元亀元年（1570）5月に毛利氏方へ現形した（『野村家文書』等）。



この史料は、永禄12年のものである可能性を否定はできないが、宗信が毛利氏配下に転じた元亀元年のものである可能性が高いと考えられる。そのいずれにせよ、「如先年」とあることより、秋上宗信はおそらく永禄9年の富田城落城以前に安来町役の収取権（及び富田納入分の町役徴集権）を大名権力から認められていたと主張し、尼子・毛利戦争による混乱にも関わらずそれは継続されているとして、坪内氏に催促状を送ったものと思われる。これは同時に、杵築町商人の坪内氏が安来町にも権益を有していたことを裏づける事実である。

したがって「安来町」は、少なくとも永禄9年以前から存在することを史料によって確認することができる。しかしながら、中世における安来町全体の姿や、その内部構成に関しては、同時代史料が何一つ残されていないと言ってよい。そのため、以下では、近代から時代をさかのぼって検討することにより、中世港町の姿を探っていきたい。

II 17世紀以降の安来町

(1) 明治期の安来町

広島大学図書館所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」（島根県関係は島根県立図書館にマイクロフィルムが所蔵されているが、地図類は原本によるしかない）には安来村地図が2点ある（同8-253）が、納められていた袋の表記によればそれらは明治10年（1877）に作成された地籍図である（写真）。それらの情報をふまえて、明治32年（1899）測図5万分の1地形図「米子」

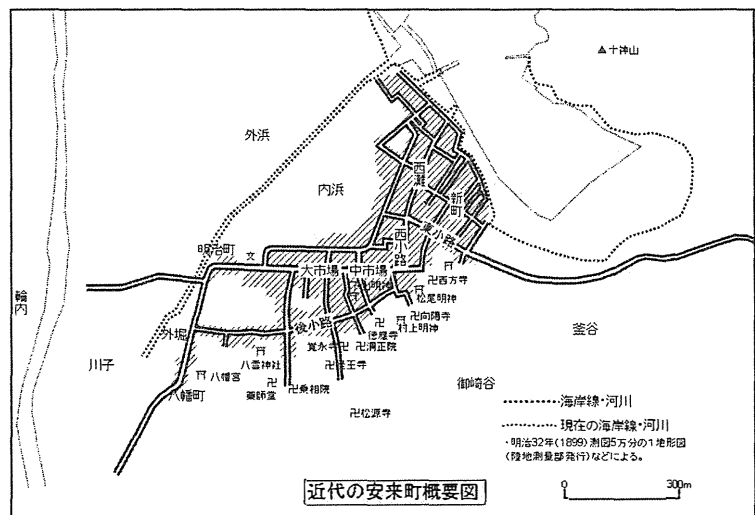


図2

「松江」（陸軍省陸地測量部）に旧安来村内の地名を記載したものが、図1である。また、これらの地図や、島根県立図書館所蔵『皇国地誌』『能義郡村誌』（1885年）、汪處文庫『安来港誌』（1915年）などに基づいて、明治期安来町の概要を記したものが図2である。

図2を見ると、特に東側湾内の海岸線が大きく変化している。また、現在の市街地はその埋立地や「内浜」「外浜」「川子」などに広く展開しているが、明治時代には逆L字形のような特徴的な形の市街地であったことがわかる。現代からでは想像もつかない大きな変化に驚かされるが、現地を子細に見れば当時の面影は随所に残されている。図2は、時代をさかのぼって検討する際に、重要な手がかりとなる。

(2) 近世の安来町

安来市誌編さん委員会『安来市誌上巻』（1999年）には、元禄11年（1698）「能義郡安来町地銭御検地帳」（「中国五県土地・租税資料文庫」8-27）に基づいた近世安来町の復元図が掲載されている。それをもとに、18世紀～19世紀初期を念頭に概要を示したものが図3である。全体的に見れば明治期と大差はないが、特に西側が近世山陰道沿い（二日市）と社日山北麓沿い（後小路）の2本の町並みに分かれていることが注意される。

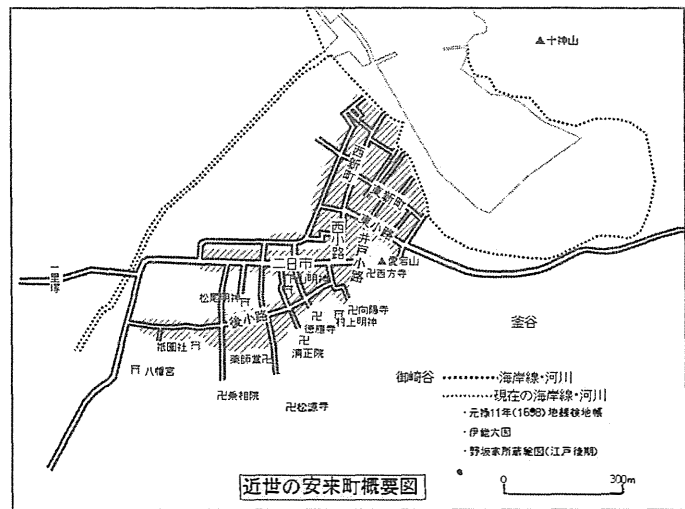


図3

図3を見ると、近世安来町は、2つの町筋が重ね合わされるようにして形成されたものであることを窺い知ることができる。近世山陰道は、西から一里塚、二日市、西小路、東小路を経て、大きく屈曲しながら町を貫通していることがわかり、その姿は愛宕山へ向かう直線路を特徴とし、計画性を推測させる町筋を作り出している。これに対して、後小路から北東側海辺へ延びる町並みは、さらに古い時代から形成・拡大していった形跡を窺わせている。

(3) 慶長20年「安来浜検地帳」の検討





慶長20年（1615）「能義郡之内安来濱御□□□（検地帳）」（「中国五県土地・租税資料文庫」8-31）は、安来町そのものの検地帳ではないが、町の輪郭を窺わせる最も早い時期の史料として重要である。ただし、現在は補修もなされて保管状況も良好であるが、もともとの欠損や貼紙により難読箇所が多い。記載されている地種は、屋敷分8筆を除き、他の277筆はすべて畠である。以下では、同検地帳を「安来浜検地帳」と略記する。



表は、「安来浜検地帳」に見られる畠の所在地・等級・筆数・面積を示したものである。所在地名は、現在では使われなくなったものがほとんどである。「安来浜」は、某袖判湯原信綱証状写（「関関録」巻115湯原文左衛門）において、永禄4年（1561）11月27日に尼子氏家臣湯原氏一族の信綱が「となりこれう人」に譲り渡した権益として「やすきのはまにやしき三間無役」が見られるように、戦国期には存在した地域呼称と考えられるが、その範囲や港町との関係は不明である。

「安来浜検地帳」に記載されている所在地名については、以下のような点を指摘できる。

「かまだに(釜谷)」「御崎谷」は、安来町の東側の小字名である。「はまだ」は、「同所輪ノ内」と記されていること、外浜・内浜といった小字名との関連性を推測させるものであること、「内浜」は木戸川以東の安来海岸線全体から社日山塊北側山裾に及ぶ字地名であったことより、旧

慶長20年安来浜検地帳記載の畠数

| 所在地 | 上畠 | | 中畠 | | 下畠 | | 下々畠 | |
|--|----|---------|----|---------|----|--------|-----|---------|
| | 筆数 | 面積 | 筆数 | 面積 | 筆数 | 面積 | 筆数 | 面積 |
| かまだに | 0 | | 0 | | 0 | | 24 | 3反3畝21歩 |
| 御崎谷(同所ひらき、同所寺分) | 2 | 1反8畝9歩 | 8 | 1反8畝12歩 | 8 | 2反27歩 | 49 | 4反7畝3歩 |
| 寺分 | 0 | | 0 | | 0 | | 10 | 7畝6歩 |
| 法花分 | 0 | | 0 | | 2 | 2畝 | 8 | 1反5畝21歩 |
| はまだ(同所藤七畠、同所しほ入、同所ひらき、同所輪ノ内、 ) | 0 | | 0 | | 3 | 8畝 | 33 | 3反4畝24歩 |
| 町ノ前(同所はまだ) | 4 | 3畝27歩 | 3 | 3畝15歩 | 0 | | 3 | 27歩 |
| 二日市()日市、屋敷ノ内、  しき) | 1 | 15歩 | 22 | 8反8畝24歩 | 1 | 12歩 | 1 | 24歩 |
|  日市(同所法衆庵、同所つまど、つまど) | 0 | | 0 | | 6 | 4反3畝 | 10 | 4反 |
| 馬場尻 | 0 | | 19 | 5反1畝9歩 | 0 | | 1 | 21歩 |
| 後小路(うしろ小路、同所屋敷あまり) | 19 | 5反7畝24歩 | 0 | | 0 | | 0 | |
| 小城ノ迫 | 5 | 2反7畝6歩 | 1 | 3畝9歩 | 0 | | 0 | |
| 八反田 | 0 | | 0 | | 0 | | 5 | 2反3畝18歩 |
| 八幡原畠ほり畠 | 0 | | 0 | | 0 | | 11 | 4反9畝12歩 |
| 八幡原 | 3 | 4畝6歩 | 0 | | 2 | 1反8畝3歩 | 8 | 3反2畝24歩 |
| かも | 0 | | 0 | | 0 | | 5 | 1反1畝9歩 |

・記載順は基本的には検地帳に準じているが、2ヶ所に現れる「御崎谷」・「はまだ」は一括し、検地帳後半に現れる「寺分」・「法花分」は御崎谷に続けて記載されているので、仮に御崎谷の下に記した。
 ・所在地名は判読困難箇所が多く、「同所」表記の場所も確定はできないうえ、帳紙の欠失・順逆も否定できないので、所在地はあくまでも暫定的な推測にすぎない。
 ・日市は欠損により判読不可能であるが、一ヶ所だけ「二」の下部と推測されるものがあるので、二日市と判断した。ただし、「同所法衆庵」や「同所つまど」は社日山南側の「法樹庵」「妻戸」に当たるものと推測され、近世の二日市の位置から見て、これらの「同所」に該当する日市は同じ場所とは考えにくいので、別に記した。その際、便宜的に真の変わり目で二つに区分したものにすぎないので、この部分は正確な表とは言えない。

安来村北側の広い範囲にかつて展開していた水辺近くの低地や浜辺に由来する所在地名と推測される。下々畠によって構成されていることからわかるように、「はまだ」とは後から陸地化した海辺部に新たに形成された地域であると思われる。

「町ノ前」「二日市」「後小路」「小城ノ迫」は、安来町の内部や近接地と考えられる。上畠・中畠が集中していることが特徴的である。未詳ながら、「小城ノ迫(古城ノ迫の意か)」は中世八幡城伝承に関わる地名である可能性がある。また、「はまだしほ入」に「七日市ノ喜三郎」、「御崎谷寺分」に「七日市ノ安五郎」、「寺分」に「七日市ノ惣次郎」といった名が見られるので、「七日市」という市場地名が存在したこともわかる。「法衆庵」「つまど」は、社日山南側と考えられる。

「八幡原」は、元亀2年(1571)3月11日尼子勝久袖判奉行人連署奉書(「鴻池家文書」)に安来地頭分の中に「八幡原之事」が見られ、近代の小字名「八幡」(図1)との関連性を推測できるので、「輪内」と同様に伯太川・山国川(吉田川)の間に位置したと考えられる。「八反田」は図1の「八反」、「かも」は図1の「賀茂」に当たるとと思われる。

以上をふまえるならば、「安来浜検地帳」に記された範囲は、城谷・瀬谷など最南端の一部を除き、近世安来村の大部分に比定される。記載されている畠には、「御崎谷」「後小路」「小城ノ迫」など社日山の斜面地に展開していたものが含まれていると推測され、文字通りの「浜」のみに限定されない広がりを持つと見られる。「安来浜」と呼称されていた地域が「安来町」を含むものと認識されていたかどうかは定かでないが、近世初期において近世安来村とほとんど同義に近い広い範囲を指す地域呼称であったことは事実と思われる。

Ⅲ 中世以前の寺社について

港町のかつての姿を推測する際に、もう一つの重要な手がかりとなるのが、寺社配置の問題である。

安来には、港町と関わりが深いと推測される寺社が、廃絶したものも含めて多数あるが、それらに関する中世以前の同時代史料は現状では皆無と言ってよい。ここでは、港町の内部や近接地に所在したと考えられる寺社に注目し、『雲陽誌』（1717年）、島根県立図書館所蔵『皇国地誌』『能義郡村誌』（1885年）、安来市誌編さん委員会『安来市誌 下巻』（1999年）などに記された後世の創建伝承の中から、中世以前にさかのぼるものを確認する。なお、下鴨社領であった中世安来荘には、賀茂神社・糺神社という荘園鎮守の役割を果たしたと考えられる神社が存在し、はじめから現在地に所在したわけでもないが、港町との関係についての位置づけがなお難しいので、以下には記していない。

- ・乗相院（天台宗） 『雲陽誌』には、「開基は行基菩薩なり」「寺を極楽といふ」「世俗談議所といふ」「境内観音を安置す」と記されている。『安来市誌』は天平14年（742）開創とする。「談議所」「観音堂」は、明暦2年（1656）「能儀郡内安来村御検地帳」（「中国五県土地・租税資料文庫」8-24、以下「安来村検地帳」と略す）に記載されている。
- ・薬師堂 明暦2年「安来村検地帳」に見られ、『雲陽誌』に「古は乗相院の境内にあり」とある。
- ・向陽寺（時宗） 『安来市誌』には、弘安8年（1285）開創との口伝を記す。慶長20年「安来浜検地帳」・明暦2年「安来村検地帳」に寺名が見られる。昭和15年（1940）に、現在の十神山下への移転が認可されている（島根県立図書館謄写本「出雲国能義郡寺院明細帳」）。
- ・松源寺（曹洞宗） 『雲陽誌』に「応永七年阿轍和尚の開山なり」、『安来市誌』に応永7年（1400）法相宗から改宗したと記されている。明暦2年「安来村検地帳」には、寺名が記されている。同軌阿轍は、太源宗眞（峨山紹碩の弟子）の法流に連なる禅僧である。中世後期以降の曹洞宗は地方伝播を広く展開していったが、松源寺の創建伝承は、出雲国において、仁多郡の総光寺や、意宇郡の白瀧とともに、最も古い時期に属している点特徴的である（「日本洞上聯灯録」）。
- ・西方寺（浄土宗） 『安来市誌』に永禄元年（1558）創建と記されている。慶長20年「安来浜検地帳」や、明暦2年「安来村検地帳」に寺名を確認できる。
- ・下山社 「能義郡神社明細帳」（島根県立図書館謄写本）には、天正11年（1583）に毛利氏の命により伯耆国大山下山大明神から勧請したと記されている。『安来市誌』は、同年7月に吉川広家が勧請したと記している（ただしこの時期は吉川経言が広家と改名する以前に当たる）。「能義郡村誌」には、野口家伝来文書として天正9年11月3日毛利輝元判物が掲載されており、『雲陽誌』にも同じ証文のことが記されている。
- ・徳応寺（浄土真宗） 『雲陽誌』は「寛永元年松円といふ僧の開基なり」とするが、『安来市誌』は慶長年間（1596～1615）の開基と記している。慶長20年「安来浜検地帳」に「松園■」、明暦2年「安来村検地帳」には「松園坊」の寺名を確認でき、関連性を推測できる。
- ・祇園社 安来神社（八雲神社）について、元禄12年（1699）に現在地へ移されたことは諸書が一致しているところであるが、それ以前の所在地については、「能義郡神社明細帳」に「趾地ハ本祇園トテ二三丁西方ニ當」たると記され、「無格社八雲神社御由緒調査書」（島根県立図書館謄写本）では、十神山から「元祇園」に移転された後、尼子氏時代の戦乱によって社殿が焼失したため、元禄6年に社殿が建てられるまで榎木2本が神木として祀られていたと記されている。
- ・稲荷社・村上社 明治7年（1874）に安来神社境内社となった稲荷神社は、寛政6年（1794）棟札

銘（島根県立図書館謄写本「稻荷神社御由緒調査書」）に、尼子氏の時代に木戸氏が築いた仮城の城内鎮守であったという伝承が記されている。大正4年（1915）に安来神社境内社となった村上神社には、賀茂・糺両社より古いとする伝承がある（「能義郡神社明細帳」）。

- ・**明光寺** 「能義郡村誌」によれば、八幡山東側に「明光寺谷」という字地名が存在した。この谷は、慶長20年「安来浜検地帳」の「小城ノ迫」との関連性が推測され、同検地帳の後年の貼紙に「小城ノ下」「母里御蔵屋敷」と記されていることも注目される所である。その呼称は、中世以前のいずれかの時期に「明光寺」という寺院が存在したことを窺わせるものであり、『安来市誌』には極楽寺支配下の「妙光寺」が廃寺の一つに挙げられている。
- ・**八幡宮** 八幡山上に鎮座していた旧八幡宮については、「八幡原」地名の存在からみても中世から続く神社と推測される。「能義郡神社明細帳」によれば、もとは字賀茂の近くの耕田中にあったものを享保3年（1718）に移転したと記されているので、これを信じるならば、中世以前には八幡山ではなく「八幡原」推定地に所在したものと推測される。

IV 中世港町の痕跡

以上をふまえ、中世港町安来について現時点で言えることのみを記したい。図4はあくまでもイメージを示した概念的なものにすぎず、仮説の域を出るものではない。

近世安来町の特徴は、二つの異なる町筋が重なり合うようにして形成された形跡をとどめている点にある。それは、内陸部から港にいたるルートと、東西の陸上交通ルートという、二つの基軸が町の存立に不可欠な段階であったことを窺わせている。その形成過程を具体的にたどることは現状では困難であるけれども、東西の陸上交通ルートは近世以降に整備されていったものと推測され、それに伴って「後小路」という呼称を付されるようになったと推測される社日山北麓の町筋は、多数の寺社が集中することからみても、起源の古いものである可能性が高いことを窺わせている。

このことは、中世の海岸線近くに東西方向の道が全くなかったということではなく、町並みの基軸となるような通りとしては、中世以前の大半は、内陸部からの経路が優越していた可能性が高いという意味である。また、伯太川周辺の氾濫原や、港が形成された入江湾内の海岸線が、どのように変化したのかについても今のところ明らかではないので、中世以前の長い時間の中で、後の「東小路」に近接する愛宕山下に海岸線が迫っていた状況から、後の「東新町」近辺、さらには近世の海岸線に至るまで、徐々に北方へ町筋が伸びていったことを想定するととどめたい。図4において東西方向の道や「中世以前の想定海岸線」を、曖昧な形で示さざ

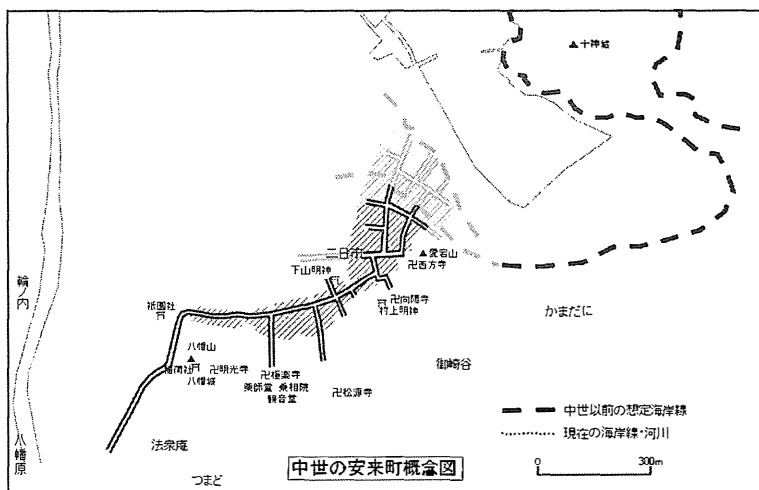


図4

るをえないのはそのためである。古くは後小路に沿う海岸線が港であったという説もあり、その可能性は十分ありうると思われるが、それがいつの時代であるのかはわからないし、安来津が港湾機能を充実させ発展を遂げていった中心拠点は、近世・近代における町の拡大過程を見る限りにおいては、十神山塊が形成していた入江の西側であったと考えて大過ないように思われる。いずれも、詳細については今後の検討を待ちたい。

8世紀の『出雲国風土記』に島として記された十神山は、勝れた眺望と、眼下に安来津を見下ろす要衝に位置したため、室町・戦国期には城郭としてしばしば抗争の舞台となった。十神山は中海を航行する船から見て恰好の目標となり、同じく城跡とも伝えられる愛宕山北西麓を中心に停泊地が形成・展開された可能性が高い。この場所に港湾機能の中心が位置したのは、愛宕山もまた十神山とともに航行の目標としての役割を兼ね備えていたからではないかと考えられる。

中世港町安来における物流拠点の中心については、慶長20年「安来浜検地帳」に見られる「二日市」と「七日市」が注目される。「二」については文字判読の問題、「七日市」については位置比定の問題を残しているが、これらが、中世安来において毎月計6回立てられた2つの三斎市の遺称であることは、5日という間隔から見ても十分ありうると思われる。

中世寺社群の宗派や、伝承によるそれらの創建時期が、それぞれ異なり、きわめて多様であることは、それだけ古くから人や物の交流が盛んであったことを裏づけている。15～16世紀における安来津最大の軍事拠点が十神城であったことは事実であるが、「馬場尻」や「外堀」といった地名は十神山とは直接関わりないものと推測され、また戦時の城塞化も想定される多数の寺社群を勘案すれば、社日山・愛宕山など町と密接不可分な位置にも軍事拠点の存在した時期があったことを想定できる。ただし、『島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第2集〉出雲・隠岐の城館跡』（1998年）によれば、愛宕山城跡・八幡城跡の城郭遺構は不明瞭である。以上のように、寺社群は宗教的・経済的・軍事的な拠点として、安来町の歴史とまさしく一体的な展開を遂げていったものと推測される。

いずれにせよ、中世段階において、すでに幾重にも積み重ねられた歴史を持つ港であったことを、随所に窺い知ることができる。

おわりに

本稿は、中世安来町を復元するための基礎的な情報を列記し、作業の入り口までようやくたどり着いたに過ぎない。現時点において指摘できる点を、まとめておきたい。

宮本雅明氏が示した「日本型港町」概念からみると、安来も近世の陸上交通路に強い影響を受けて大きく変化したと推測される点において、共通する性格を持つと考えられる。しかし、安来の場合には、近世山陰道が先行する町筋に従って大きく屈曲し、船着場も海岸へ直行する道（西新町など）の先端部に位置する点において、中世以前の特徴を色濃く残しているように思われる。中世以前と近世以降の港町の特徴が共存し、そのどちらかが優越していない点に特徴がある、と言ってよいかもしれない。それは、地形的な特質によるところが大きいと考えられるが、内海の拠点であると同時に日本海水運の船の寄港地でもあったことによる船舶規模の特異な多様性、そのような場所で海運や商業取引に携わる人々の存在形態、近世山陰道そのものの特質など、様々な要因を想定することができる。

中近世移行期の地域社会にどのような変化が見られたのか、それが地域政権など諸権力や統一政権

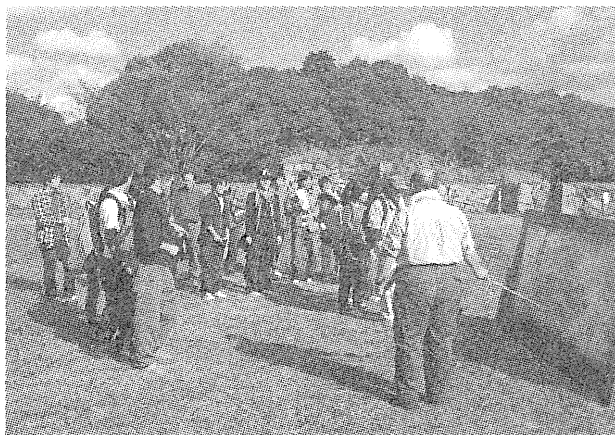
とどのような関連性を持つ変化なのかを考える際にも、港町は重要な手がかりとなる。特に安来のように、東アジア海域の広域的物流につながり、内陸部後背地域との密接な結び付きを想定できる港町は、この時期の日本列島が直面した大きな経済変動や統一政権による政策基調の具体像を窺わせる重要な素材であると考えられる。とりわけ山陰地域ではそのような検討視角が必要であり、にもかかわらず港町に関する先行研究が少ない。いずれも、今後の重要な課題であると考えている。

〔付 記〕

- ・本稿に係る史料の閲覧・撮影等にあたり、お世話いただいた広島大学図書館と島根県立図書館に対して、厚く御礼申し上げます。
- ・本文中に記したものを以外に、安来市総務部情報管理課『やすぎ図鑑』（2004年）、安来町今昔写真集編集委員会『ふるさと安来のまち写真集』（2007年）、安来港誌改訂編集委員会『改訂版安来港誌』（2009年）を参照した。
- ・本稿執筆のきっかけは、2009年11月7日に、教育学部共生社会教育専攻学生など14名（他に教員4名）とともに、安来市の和鋼博物館・月山富田城跡などの見学を行ったことにある。特に、「ゲリラ豪雨」に見舞われながら安来の町を散策した際に、地域全体の基本的骨格をとらえることがいかに難しい時代になっているのかをあらためて痛感したことが、最も大きな理由である。

現在は、身近な地域の個性をふまえ、世代を越えて残し伝えていくべきものが何であるかを感得しにくい時代であるように思われる。特に最近の数十年間は、その土地の持つ固有性が容易には見えない場所が急激に増えている。それは、単に昔のことを知っているかどうかということとは全く意味が異なっていて、人々の価値観そのものにきわめて大きな変化をもたらしているように感じられる。地域認識・地域理解とは何であるのかを、引き続き学び考えていきたい。

見学当日にお世話になった、高岩俊文氏（和鋼博物館）・舟木聡氏（安来市教委文化課）に対して、厚く御礼を申し上げます。



2009年11月7日 月山富田城跡にて